

国 いわしろべいさんじ きょうづかしつどひん
岩代米山寺経塚出土品

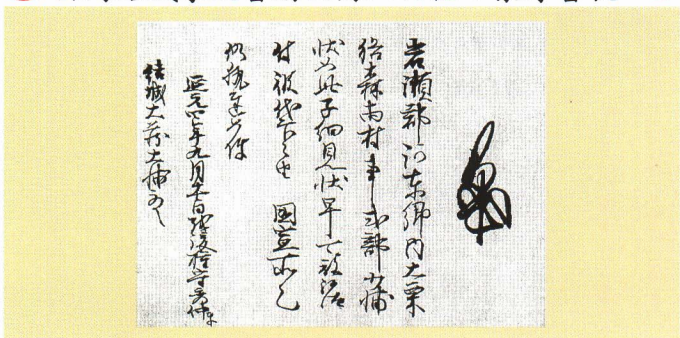
21



10基発見された経塚の内、三号経塚から出土した埋納品が一括指定されました。埋納品には、青銅製経筒、陶製外筒、刀子、銅鏡、銅製鐔、鉄鎌があり、その内、陶製筒の外表面にはヘラ状のもので書かれた銘文がありました。これには、寺の名称(米山寺)、施入者(経筒を埋納した人)の名前、年号(承安元年)など書かれており、米山寺の存在や時代が明らかになりました。この銘文に書かれた施入者と年号が飯坂町の天王寺経塚と桑折町の平沢寺経塚から発見された陶製の筒にも書かれていることから、双方に何らかの関連性があったものと注目されています。

国 しらかわゆう きげもんじょつけたり ささそうじゅんしよじょう
白河結城家文書附四月八日佐々宗淳書状

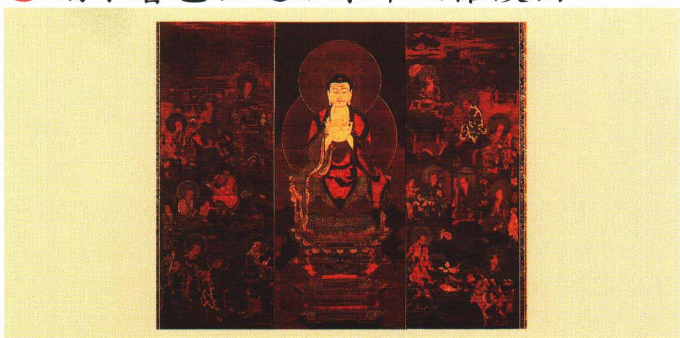
22



南北朝時代、南朝の正当性を唱える中心人物北畠親房の自筆文書などが、市内本町の相楽家から発見されました。この文書は、親房が常陸国(茨城県)の小田・関の両城に約5年間滞在した際、関東と奥州の境にあたる白河の地理的重要性と同地の領主結城氏の勢力を考慮し同氏に南朝の正統を訴え、その軍事上の援護を数回にわたって請願したものです。江戸時代になってから、この古文書は徳川光圀によって調査されており、この事実は相楽家に所蔵する佐々宗淳(光圀の家臣)自筆書状(古文書借用に対する礼状)によって明らかにされています。(写真は白河結城家文書)

国 けんぼんちゃくしよくしゃかによらいじゅうろくらかんず
絹本著色釈迦如来十六羅漢図

23



縦長の絹地3枚に極彩色でかかれたこの仏画は、蓮華座にのる釈迦如来図と16人の羅漢(仏の教えを修行し煩惱を断ち切り人々の供養をうけるに相応しい人)をそれぞれ8人ずつ配した2枚図の三幅からなり、各々が表装されています。描写は各羅漢の個性、服装など細部に行き届き、特に釈迦如来がのる蓮華座は精巧で宋画の影響を受けているものと考えられます。また、光背の縁取りに截金(金箔を細く切って極彩色の金色線を現す)の技法を使っていること等から鎌倉時代末期の作品と考えられます。本図は東京の麻田駒之助氏(元中央公論社社長)から寄贈されたものです。

国 しほんぼくしよごみずのおてんのうしんかんごかいし
紙本墨書後水尾天皇宸翰御懐紙

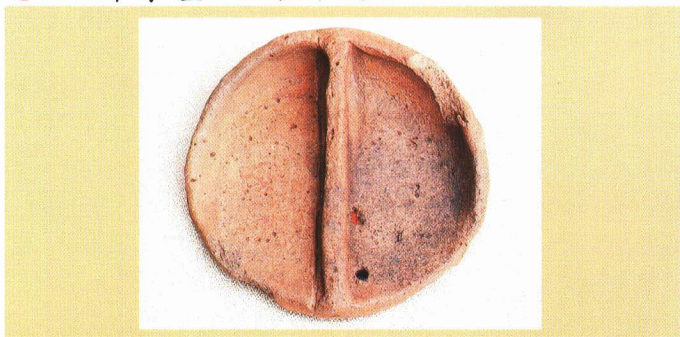
24



この懐紙(和歌・連歌などに書き付ける用紙)は、市内本町の相楽家が所蔵する白河結城家文書(南朝方の北畠親房自筆文書等、昭和53年国指定重要文化財)が、江戸時代に水戸黄門でおなじみの水戸藩主徳川光圀によって調査(「大日本史」を編纂するための資料調査)された際、光圀から相楽家に贈られたものです。
春草 分みれば をのがさまざま花ぞ咲く
ひとつ緑の 野辺のおくさも
後水尾天皇(1596~1680)は、和歌に長じ、歌集「鷗巢集」などがあります。俳号は「玉露」といいます。

国 はじしゅぼくにめんえんけん
土師朱墨二面円硯

25



この硯は、首藤保之助氏(本市出身、阿武隈考古館の創設者、昭和33年考古資料の大部分を本市に寄贈、市立博物館建設の基礎となった。)が昭和15年8月24日、千葉県市川市真間の土取り場から採集したもので、当時は甑(米などをむす器具)の底と考えられていました。その後の研究で珍しい形の硯であることがわかりました。直径13cm、中央に堤があって硯を二分している素焼きの二面円硯です。二面のうち右側には墨、左側には朱が残っており、また右側の下方には小さな穴があることから、紐を通して下げたものと考えられています。